

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Execution of Virtuchi : A Murder Case and Its Memory in the Bolivian Amazon

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 晃 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004093

ビルトゥチの処刑

——ボリビア・アマゾンの一殺人事件とその記憶——

齋 藤 晃*

The Execution of Virtuchi: A Murder Case and Its Memory in the Bolivian Amazon

Akira Saito

ボリビア・アマゾンのモホス地方の先住民トリニタリオのあいだには、近年まで、専門の霊媒師が死者の親族の依頼を受けて、故人の霊を呼び出すという降霊術が存在していた。降霊術にやってくる死者はすべて先住民だが、白人で唯一、ビルトゥチという大昔の殺人者がたびたび現れ、失踪者の居所や紛失物のありかを告げることで、魂の救済に不可欠なキリスト教の祈りを受け取っていた。本論は、なにゆえ先住民の降霊術に白人の殺人者の霊が呼び出されるのかという疑問に答える試みである。

歴史資料によれば、ビルトゥチは20世紀初め、殺人の各で公開の銃殺刑に処せられた。彼の処刑は、成立後間もないモホス地方の司法機関が執行した最初の処刑であり、共和国政府がその権力を誇示する最初の機会だった。他方、処刑という国家儀礼を初めて目にした先住民にとって、それは衝撃的な出来事であり、その衝撃が後にビルトゥチにまつわる特異な信仰と伝承として具体化したのだと推定される。

筆者の考えでは、先住民にとってビルトゥチの処刑は、それ以後国家が神になりかわって罪を裁くのだということを宣言する儀礼的演出にほかならなかった。こうした国家司法の概念は、罪を裁く権利を神にのみ認める先住民の司法概念と真っ向から衝突するものだった。本論は、ビルトゥチにまつわるトリニタリオの信仰と伝承を、国家による司法的正義の独占に対する彼らの批判、およびその転覆の試みとして読み解こうとするものである。

* 国立民族学博物館博物館民族学研究部

Key Words : Bolivian Amazon, Trinitarios, cult of the dead, colonial situation, State administration of justice

キーワード：ボリビア・アマゾン、トリニタリオ、死者信仰、植民地的状況、国家司法

Until recently, the Trinitarios, an indigenous people of the Moxos region of the Bolivian Amazon, occasionally held séances where the medium invoked the spirits of the dead at the request of their living relatives. The dead who came to the séances were all but one indigenous people. The only exception was Virtuchi, a white man who is said to have been a murderer in the remote past. He would often come to the séances and tell the Trinitarios where they could find a missing person or object and, in exchange for this service, receive Christian prayers which were indispensable for his salvation. In this paper, I will try to answer the question why the spirit of a white murderer was invoked at the indigenous séances.

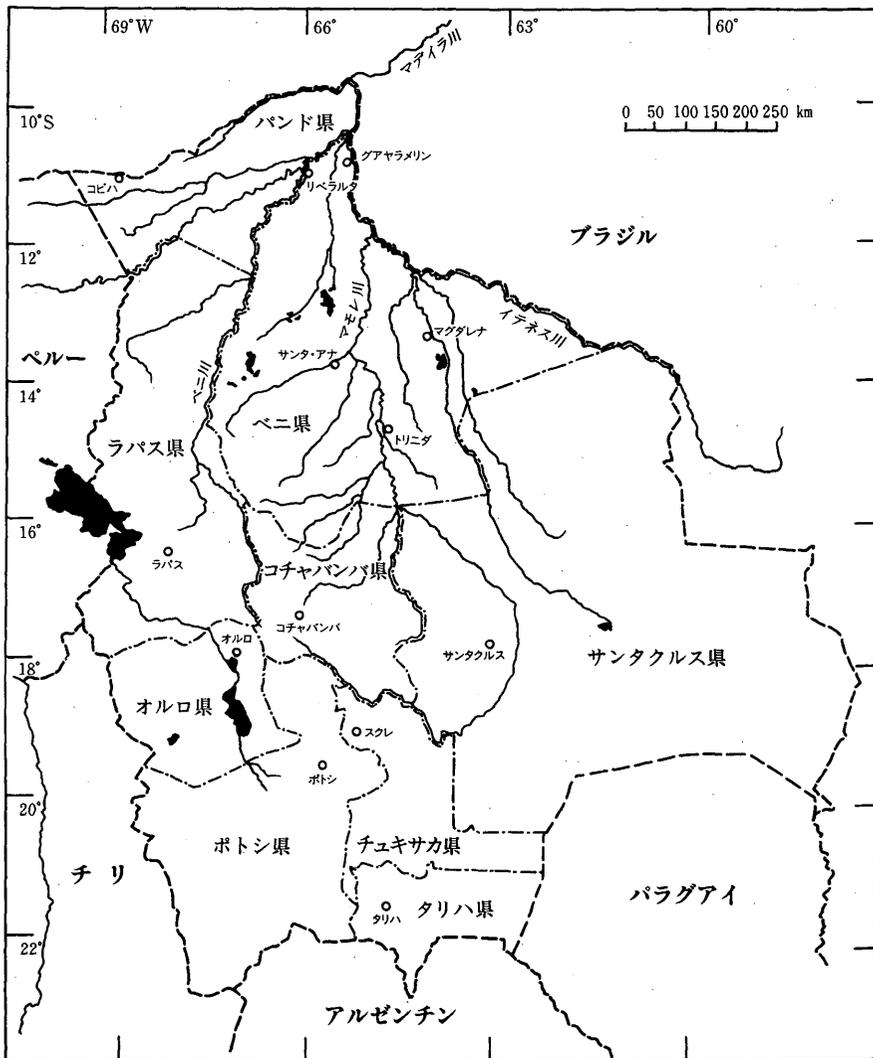
Historical sources indicate that Virtuchi was charged with a murder and publicly executed by a firing squad at the beginning of the 20th century. This was the first public execution in the Moxos region, an ostentatious manifestation of the power of the newly formed local judicial apparatus. It can therefore be assumed that the indigenous people, who theretofore had never witnessed such an event, would likely have been profoundly impacted by the experience and this would subsequently have given rise to their peculiar beliefs and traditions concerning Virtuchi.

It is my intention to show that the execution of Virtuchi was, from the viewpoint of the indigenous people, an effectively performed ritual proclamation that the State would thereafter take hold of the administration of justice and thereby replace God as the dispenser of justice. This concept of State justice would inevitably have clashed with the indigenous concept of divine justice. This paper will interpret the beliefs and traditions concerning Virtuchi as a narrative of criticism and subversion of State monopoly of justice.

- | | |
|-----------------|-------------------|
| 1. はじめに | 3.1 殺人事件の再構成 |
| 2. 殺人者の記憶 | 3.2 事件の社会的背景 |
| 2.1 トリニタリオという人々 | 4. 国家儀礼とその転覆 |
| 2.2 ビルトッチの伝承 | 4.1 銃殺と贖罪 |
| 2.3 記憶の用途 | 4.2 国家による司法的正義の独占 |
| 3. 歴史資料が語るもの | 5. おわりに |

1. はじめに

わたしがその男のことを初めて耳にしたのは、1996年2月、ボリビア・アマゾンの一村落で、年輩の女性と話をしているときのことである¹⁾。雨季のさかりのむし暑い午後、日干しれんがでできた薄暗い家のなかで、彼女が語ってくれた不思議な話を、



地図1 ボリビア共和国

メモを取るのをしばし忘れて聞き入ったことを、いまでもよく覚えている。

1994年10月以来わたしは、ボリビア共和国ベニ県モホス郡で、トリニタリオ(trinitario)と名乗る人々を対象に民族学的調査を行っていた。彼らは17世紀末から約1世紀にわたり同地方に存在したイエズス会ミッションのもと成立した民族であり、イエズス会時代に連なる宗教的色彩の濃い文化を保持している。

当時わたしがとりわけ興味を持ち、彼らとの会話のなかで好んで取り上げたテーマは、数年前まで彼らのあいだに存在していた一種の降霊術である。これは、専門の霊媒師が死者の親族の依頼を受けて、故人の霊を呼び出すものである。その目的は、死者の死因を探る、失踪者の居所や紛失物のありかを突き止める、盗難があったときに犯人を特定するなど、さまざまである。降霊術は通常、日が暮れてから、依頼人の家で行われる。聖人像をまつた祭壇がしつらえられ、死者をもてなすための食べ物、飲物が用意される。祭壇の周囲には蚊帳やシートで囲いがもうけられ、霊媒師以外の人々は囲いの外側に着席する。準備が整うと、ろうそくが消され、暗闇のなか、死者がひとり、またひとりとやってくる。現世に戻った死者は、自分の名前を名乗り、親族と言葉を交わし、彼らの質問に答えてくれる。

先の年輩の女性との会話では、彼女が幼いころ、母親に付き添われて参加した降霊術が話題になっていた。依頼人の男性が、彼の母親が生前、家の床に埋めた金の装身具のありかを探るため、霊媒師に彼女の霊を呼び出してもらおう、というものだった。しかし、現れた母親の霊は、息子の質問に答えることを拒んだ。というのも、そもそも彼女が装身具を家の床に埋めたのは、息子たちが欲に目が眩んで兄弟争いをすることがないように、という理由からだったのだから。

そこに、ビルトッチ²⁾がいた。彼もまた霊媒師に呼ばれてやってきた霊のひとりなのだが、先の親子の会話を聞いていたのだろう、沈黙を守る母親にかわって、こう言ったという。「あそこだよ、あの柱のところだ」。そして、こう付け加えたという。「おまえたちがいくら探しても、見つからんだろうな。動くからね」。つまり、母親の霊が装身具をあちらこちら動かして、息子たちが見つけられないようにしている。または、装身具自体が動き回って、彼らに見つからないようにしている、というのである。

ビルトッチという人物がわたしの興味をひいたのは、彼が「カラヤナ(carayana)」すなわち白人だからである。わたしの知るかぎり、彼はトリニタリオの降霊術にやってくる唯一の白人であり、トリニタリオ自身もそのことを認めている。そもそも降霊術は、トリニタリオが他界した親族と言葉を交わし、祈りを捧げてその霊をなぐさめるためのものである。それゆえ、トリニタリオのあいだに親族を持たない白人の霊が

降霊術にやってくることは、原則としてありえない。白人はトリニタリオの降霊術を悪魔崇拝とみなして攻撃しているし、トリニタリオはトリニタリオで白人を無信仰とみなし、彼らが自分たちの宗教観を共有することを期待していない。

ビルトッチの特異性は、その民族帰属だけではない。先の女性によれば、彼は「人殺し」なのだという。生前彼は、殺人の咎で役人に捕らえられ、公開の銃殺刑に処せられたというのである。彼女自身はその処刑を見ていないが、彼女の母親はそれを目撃し、そのようすを彼女に語ってくれたという。

殺人という大罪を犯した者なら、当然地獄にいるはずである。しかし、降霊術にやってくる死者は、みな天国にいなければならない。というのも、天国にいるからこそ、神のごとく下界を隅々まで見渡せるのであり、紛失物のありかも、盗人の身元も知ることができるのだから。地獄に落ちた者は、そもそも地上に戻ってくることはできないし、かりにできたとしても、生者の質問には答えられないのである。

それでは、いったいどうして「カラヤナ」の「人殺し」が、トリニタリオの降霊術にやってくるのだろうか。この人物のどのような特徴が、トリニタリオの関心をひきつけ、彼らにその霊を呼び出すように促したのだろうか。人を殺したこと、そして公開の銃殺刑に処せられたことには、トリニタリオからみて、なにか特別な意味があるのだろうか。あるとすれば、それはどのような意味か。本稿は、これらの一連の問いに答えるための試みである。

ビルトッチという歴史上さほど重要とも思われない人物を、論文の主題としてわざわざ取り上げることは、正当化を必要とするだろう。わたしとしては、以下のふたつの点を強調したい。

(1) 先住民が表象する白人像の一例としてビルトッチを分析することで、先住民が外来者である白人の存在をどのように理解し、彼らとどのような関係を結ぶことを望ましいと考えているかを明らかにすることができる。

ラテンアメリカでは通常、先住民と白人との関係は、権力の不均等な配分に基づく、緊張と軋轢に満ちた関係である。トリニタリオのケースも例外ではない。約1世紀にわたるイエズス会ミッション時代、彼らは宣教師とのあいだに比較的安定した協調関係を築き上げ、独自のキリスト教文化を創り出した。しかし、ミッション体制下の白人との協調は1767年のイエズス会追放により破綻し、それ以後白人は、おおむね彼らを抑圧し、搾取する存在となった。とりわけ19世紀中葉以降、大勢の白人植民者がアマゾンの天然資源を開発するためモホス地方に入植し、先住民の土地と家畜を奪い、彼らの労働力を搾取するようになった。現在ではあからさまな抑圧や搾取はなくなっ

たが、先住民と白人との不均衡な関係は依然として維持されている。

一般に、先住民は、白人とはそもそもどのような存在であり、彼らとどのような関係を結ぶべきかについて独自の考えを持っている。彼らの考えは、白人文化のイデオロギー的圧力ゆえに、例外的にしか声高に主張されることはない。それらは通常、先住民文化の要素を色濃くとどめる儀礼や伝承に、つつましやかに表現されているにすぎない。

ラテンアメリカはそのような事例に事欠かない。一例として、アンデス高地の殺人鬼の伝承を取り上げてみよう³⁾。ナカフ (nakaq)、ピシュタコ (pishtako)、カリシリ (kharisiri) などと呼ばれるこの想像上の存在は、白人の姿をしているが、魔法の粉で先住民を昏睡させ、その脂肪を抜き取って殺害する。抜き取られた脂肪は、以前は教会の鐘を铸造したり、薬を調合したりするのに使われたが、現在では産業機械や自動車、飛行機、コンピューターなどの潤滑油として使われる。この殺人鬼の伝承には、アンデス高地の先住民が、白人とその文化に対して抱いている両義的な感情、すなわち抑えがたい羨望の念と根深い不信感が、象徴的に表明されている。先住民は、彼らの生命力を奪い取る殺人鬼を恐れ、忌み嫌いながらも、その魔力に魅了され続けているのである。

先住民の伝承にうかがわれる彼らの白人観は、長年にわたる白人との交渉の過程で形成されたものであり、いわば歴史的に濾過され、凝縮されたものである。それは、伝承を受け継いできた大勢の人々により匿名化され、社会化された観念であり、それゆえ高度に寓意的、象徴的である。だからこそ、その観念は、状況の変化に適応する力を持ち、決定的瞬間には、多くの人々の心をとらえることができる。実際、先の殺人鬼の伝承は、1980年代後半、左翼ゲリラの活動が活発化するペルーにおいて、大流行をみているのである。

同様に、トリニタリオが語るビルトゥッチの伝承も、彼らの白人観を象徴的に表明していると考えすることはできないだろうか。伝承のなかに登場するビルトゥッチがその歴史性をとどめている以上、彼の姿をそっくりそのままトリニタリオにとっての白人一般の象徴とみなすことはむずかしいだろう。しかし、少なくとも、トリニタリオが白人との交渉を通じて培った歴史的経験の一部が、なんらかのかたちで伝承のなかに込められていることを示す徴候としてビルトゥッチの白人性を解釈することは、無理なことではないだろう。

(2) ビルトゥッチにまつわる現在の伝承を分析することで、そのもととなった過去の出来事を再構成することができる。とりわけ、現在の伝承は、当時のトリニタリオ

がビルトッチの殺人事件をどのように受け止め、そこにどのような意義をみとめたかを解明するための有益な手がかりを提供してくれる。

ビルトッチの伝承の特異性は、その明白な歴史性にある。わたしのインフォーマントが語ったそのとおりではないにしても、そのもととなった出来事はまちがいに存在し、過去の記録を調べれば、それをある程度復元することができるのである。

ただし、文字記録は白人が書き残したものである以上、先住民への言及にとぼしい。また、そのわずかばかりの言及も、白人の観点からなされており、客観的な記述にはほど遠い。それゆえ、文字記録から先住民の行動なり思考なりを再構成することは、困難をきわめる。他方、先住民の口頭伝承は、文字記録のような同時代性を持たないが、たしかに先住民自身の考えを反映しているという利点を持つ。たとえその考えが白人文化の影響から自由になっていないとしても。

わたしの考えでは、ビルトッチにまつわる信仰と伝承の根底には、彼の殺人事件が当時のトリニタリオに与えた心理的衝撃がある。その衝撃が、彼の名を伝承にとどめ、その余波が現在にまで及んでいるのである。そして、前述のように、その衝撃は先住民と白人が関係を取り結ぶその境界線上で発生したものである可能性が高い。わたしはそれを復元したいと考えている。

たしかに、ビルトッチの伝承は、過去の記憶そのものではなく、過去の記憶の現在における再利用である。それは、過去に起きた出来事の忠実な再現などではなく、過去の記憶が現在の用に供されるため手を加えられたものである。とりわけ、霊媒師が降霊術の会衆に対する効果を計算したうえでビルトッチの記憶を操作していることは明らかである。もっとも、だからといって、現在の伝承は過去の出来事とまったく無関係に成り立っている、ということにはならない。歴史的伝承は、過去と現在の共鳴のもとに成立しているのが常であり、前者が100パーセント後者の創作であることはまずない。わたしは、現在の伝承と過去の出来事を結ぶかぼそい糸を、危険を承知であえてたぐりよせてみたいのである。

2. 殺人者の記憶

2.1 トリニタリオという人々

トリニタリオは現在、ポリビア共和国ベニ県のセルカド、マルバン、モホスの3郡にまたがって住んでいる。彼らの人口は、1990年代中葉の国の統計調査によれば9813

人であり (Bolivia 1995: 755), おもな人口密集地区はベニ県の首都トリニダと、モホス郡のサン・ロレンソとサン・フランシスコである。彼らの居住地域は大部分、モホス平原と呼ばれる熱帯サバンナに属しており、そのため1年を通じて気温が高く、降水量が多い。彼らの主たる生業は、焼き畑農耕による米、マニオク、バナナなどの栽培、河川や湖沼での漁撈、豚やにわりの飼育などである。20世紀初めまでは、広大なサバンナを利用した牛の牧畜が盛んだったが、現在では畜産業は白人の手に握られている。

民族学の文献では、トリニタリオは通常、モヘーニョ (mojeño) と呼ばれるアラワク語系の民族の下位集団として位置づけられている。スペイン人到来以前にモホス平原に住んでいた諸民族は、17世紀末、イエズス会の宣教師によりミッションへと集められた。それらの民族のうち、イエズス会士がモホ (mojo) と呼んだ人々は、その大部分がロレート、トリニダ、サン・イグナシオ、サン・ハビエルの4つの布教区に集められた。以後、1767年に修道会がスペイン領から追放されるまで、彼らはミッション体制下に置かれ、彼らの社会と文化は根本的に再編成された。その顕著なあらわれが、布教区を核とする民族の創出である。おそらく18世紀後半、4つの布教区の住民は、それぞれの町をアイデンティティの基盤に据える4つの民族を創り出した。ロレートのロレタノ (loretano), トリニダのトリニタリオ, サン・イグナシオのイグナシアノ (ignaciano), サン・ハビエルのハベリアノ (javeriano) である (齋藤 1997)。これらの民族は、近年消滅したロレタノを除いて、現在でも存続している。

トリニタリオは、カトリック信仰を核とする宗教色の濃い文化を保持している。彼らが「慣習 (costumbre)」と呼ぶその文化は、彼らと白人を区別する最大の特徴であり、彼らが彼らであることの証である。「慣習」は、祭礼をはじめとするさまざまな宗教的慣行の実践から成り立っている。列挙すればきりが無いが、守護聖人祭、トリニダの大祭である6月6日の聖十字架顕彰の祭、クリスマスから聖週間までの一連の行事、聖母マリアの信心講の行事、誕生から死までのさまざまな通過儀礼、死者の冥福を祈る儀礼、ミサへの出席、などなどである。

トリニタリオの集落には、「慣習」の実践を支えるさまざまな組織が存在する。そのうちもっとも重要なのは、カビルド (cabildo) と呼ばれる評議会である。カビルドは集落の各々に存在し、成人男性全員の参加を原則とする。その役割は、祭礼の執行のほか、共同体の治安維持、紛争の調停、共有財産の管理、公共の土木事業の実施、対外折衝など、広範囲に及ぶ。もっとも、トリニダやサン・ロレンソ、サン・フランシスコなど、白人との共存を余儀なくされている集落では、重要な政治経済的機能は

共和国政府の役所に奪われており、カビルドの役割は宗教的なものに限定されている。

トリニタリオのあいだには、カトリック信仰のほか、必ずしもカトリックとは呼べない非正統的信仰も存在する。悪魔信仰、邪術、死者信仰、自然界の精霊の信仰、メンアニズム信仰などがそうである。それらの信仰を非正統的と呼ぶのは、トリニタリオ自身がそれらを神の信仰と異なり、それと対立するものとみなしており、それらを表明したり実践したりすることにためらいやうしろめたさを覚えているからである。奇しくも、それらの信仰は、スペイン人到来以前の土着の要素をもっともよくとどめているものでもある。先に言及した降霊術も、そうした非正統的信仰のひとつである。

降霊術は、トリニタリオのあらゆる宗教行事がそうであるように、祈りと食事から成り立っている。共同体の人々が集会所につどい、祈禱師（doctrinero）の導きのもと祈りを唱え、食事をともにすることは、祭礼に不可欠の要素である。この祈りと食事は、「会食（comilona）」、または「施し（limosna）」と呼ばれる。「施し」とは、死者への施しものという意味である。祭礼のおりの共同の祈りと食事は、いかなる機会に行われようとも、常に死者に捧げられているのである。食べ物と飲物で死者をもてなすという考えは、ラテンアメリカの先住民のあいだでよくみうけられる。トリニタリオの説明では、死者は肉体を持たない「靈魂（espíritu）」であり、実際に飲み食いすることはない。それでも死者は、食事の「生命力（alma）」、「精髓（espíritu）」、「恵み（gracia）」などを味わうことができるそうである。

降霊術は、それ自体として特別な名称を持たず、単に「会食」、「施し」などと呼ばれる。もっともそれは、祭礼のおりの「会食」、「施し」とはかなり趣を異にする。後者が日中、共同体の集会所で行われるのに対し、前者は夜の暗闇のなか、個人の家で行われる。降霊術を取りしきる霊媒師は、スペイン語で「エスピリティスタ（espiritista）」、トリニタリオ語で「ムエチュヒル・ビヤ（muechjiru viya）」と呼ばれる。後者は「神に語りかけられた者」を意味する。実際、トリニタリオの霊媒師は召命型であり、ある日突然、神やキリスト、聖母に語りかけられることがきっかけで、自分の才能を自覚するようになる。女性がほとんどだが、男性の霊媒師も若干いたそうである。彼らは普段、一般の人々と変わらぬ生活を送っている。そして、死者の霊を呼び出してほしいという求めに応じて、随時霊媒を行う。金銭の授受はなく、依頼人が死者のために用意した食べ物と飲物が、霊媒師にお礼として与えられるだけである。

降霊術では、まず聖人が呼び出される。暗闇のなか、布などで仕切られているため、声と音しか聞こえないが、天使ミカエルや聖母カルメンが祭壇代わりのテーブルのうえに降り立って、集まった人々にあいさつする。人々は祈禱師の導きのもと祈りを

唱え、それが終わると聖人は去っていく。それから、複数の死者がやってくる。彼らもまた、自分の名前を名乗り、親族にあいさつする。死者が全員そろると、会衆はふたたび祈りを唱える。それが終わると食事になる。食事は鳥肉、ゆでたまご、米餅、ゆでバナナ、チチャ（マニオクの発酵酒）などである。死者がそれらを飲み食いしている音ははっきり聞こえるという。しかし、彼らが去ったあと、ろうそくをふたたび灯してみると、食事には手が付けられた形跡がまったく見当たらないそうである。

降霊術についてわたしがトリニタリオから聞くことができた話は、そのほとんどが、ひとりの女性霊媒師にかかわっている。彼女のことをかりにアンヘラ・カユワと呼ぼう。アンヘラはサン・ロレンソに生まれ、成人後、そこで降霊術を行っていた。しかし、彼女の降霊術を悪魔崇拝とみなす白人の度重なる迫害を受け、町を去って、インボロ＝セクレ地域（ベニ県モホス郡）を放浪して過ごすようになった。そして、わたしの調査から10年ほど前、セクレ川上流で亡くなった。ビルトゥッチを降霊術に登場させたのは彼女である。降霊術が霊媒師の演出に大きく依存していることを考えれば、これは彼女の創作である可能性が高い。もっとも、後で詳しく述べるように、ビルトゥッチという存在には、ひとりの霊媒師の気まぐれ以上の深い意味が込められている。

2.2 ビルトゥッチの伝承

前置きはこれぐらいにして、トリニタリオが語るビルトゥッチの伝承をいくつか紹介しよう。ビルトゥッチはアンヘラ・カユワの降霊術の常連だったらしく、多くの者が彼女の降霊術との関連で彼のことを想起している。彼に関する証言の多くは、白人の霊も例外的に降霊術にやってきたということ伝えるだけの簡潔なものだが、その一方で、彼が生前どうい人物であり、どのような事件を起こしたかを詳しく伝えるものもある。以下の4人の人物の話がとりわけ詳しいので、それらを要約しよう。

証言①

ビルトゥッチはカラヤナであり、人殺しである。人々は彼を捕らえ、両足に鎖をつけて牢屋に放り込んだ。そして、広場に引き出し、その周囲を引き回した。そのとき、カビルド役人は広場の四つ角で出立ち止まり、見物人に説教を垂れた。人殺しになってはいけない、この犯罪を繰り返してはいけない、など。それから、ビルトゥッチは墓地に引き立てられた。すでに墓穴が掘られており、その横に椅子が置かれていた。彼はそこに座らされた。少量のパン、コーヒー、タバコなどが与えられ、彼がそれを食べているあいだ、役人たちはふたたび説教をした。食事が終わると、人々は黒い布で

彼の目を覆った。そして、銃殺が行われた。小銃を持った男が、額に1発、胸に1発、腹に1発打ち込み、3発目でビルトッチは墓穴に崩れ落ちた。

罪人を小銃、猟銃、ライフル銃などで殺すと、彼の罪は清算され、彼は清くなる。銃殺されたビルトッチはその罪を清算され、清くなったので、降霊術にやってきた。彼はカラヤナでただひとり、降霊術にやってきた。

(冒頭で紹介した降霊術の話の続き。語り手はサン・ロレンソ在住の55才の女性。インタビューは1996年2月11日、サン・ロレンソの彼女の家で行われた。)

証言②

ビルトッチはむかしの人殺しである。彼はカラヤナで、何人もの人を殺した。警吏が彼を捕まえ、鎖に繋いだ。しかし、脱獄を3回も繰り返した。ビルトッチはもはや人間ではなく、悪魔そのものだった。最後に捕まったとき、鎖ではなく縄で縛られた。彼は怪力の持ち主だったが、20人の警吏が彼を押さえつけ、牢屋に入れた。それから、彼は目隠しをされ、銃殺された。銃殺はトリニダの広場の中央で行われた。彼は椅子に座らされたが、しゃべり続けた。銃弾を5発受けたが、まだ死ななかつた。銃をよこせ、おれが撃ち方を教えてやる、と叫んだ。最後に両腕を撃たれたとき、ようやく死んだ。ウクマリ (ukumari) と同様、彼の魂は腕にあったのである。

ビルトッチの魂は救われた。そうでなければ、降霊術にやってきて話をするはずがない。彼を銃殺した者が、彼のかわりに地獄に落ちたのだ。もしビルトッチが棍棒で殴り殺されていたら、彼の魂は救われなかつただろう。銃殺されたからこそ救われたのである。銃は火であり、火で殺された者は、罪を清算されて清くなるのである。

ビルトッチは、アンヘラの降霊術にやってきてスペイン語で話をした。なにが物がないと、人々は彼女のところに行った。すると、ビルトッチが現れて、人々の質問に答えた。衣服、斧、鋤などが紛失したり、牛がいなくなったりしたとき、人々はビルトッチに誰が盗んだか教えてもらい、盗人に弁済を要求した。ビルトッチへの報酬は祈りやミサであり、金ではない。

(語り手はサン・ロレンソ在住の73才の男性。彼はアンヘラ・カユワの実の弟である。インタビューは1996年2月23日と29日、サン・ロレンソの彼女の家で行われた。)

証言③

ビルトッチはカラヤナであり、人殺しである。彼はトリニダの刑務所を脱走し、サン・ロレンソ近くの森のなかに隠れた。そして、夜になると村に出てきて、にわとり、

干し肉、ナイフ、マッチなどを盗んだ。トリニダからは、彼を見つけ次第殺すようにという委任状が来ていた。やがて、ビルトッチは村人と交流するようになった。彼は村人に危害を加えないと約束し、村人は彼を恐れて食事を与えるようになった。当時、村にカラヤナはおらず、たまねぎや麺などのカラヤナの食べ物もなかった。ビルトッチは村人が出す食事にあきて、もっといいものを食わせろと要求するようになった。そのため、両者の仲は険悪になった。とうとう、カビルドがトリニダに使いを派遣し、彼を告発した。警察がやってきて彼を捕らえ、トリニダに連行し、投獄した。しかし、その6カ月後、彼はふたたび脱獄し、サン・ロレンソに舞い戻った。怒り狂った彼は、村人を殺そうとした。しかし、村人は彼を捕まえ、縛り上げた。再度、トリニダから使者がやってきて、彼を処刑した。

処刑はサン・ロレンソの広場で行われた。人々が処刑を見て、同じ犯罪を繰り返さなくなるよう、広場で行われた。ビルトッチは両手を後ろ手に縛られ、足は鎖で繋がれた。彼は警察に付き添われて広場を一周させられた。広場を回りながら、彼は神に許しを乞い、自分の悪行を忘れ、自分を受け止めてくれるよう祈った。それから、彼は広場の中央の椅子に座らされた。胸のところが椅子に縛りつけられ、両手も後ろ手に縛られ、目隠しをされた。死刑執行人がふたり、100メートル離れたところに立った。用意に手間取っていたので、彼は、さっさとやってくれ、と叫んだ。執行人が小銃を撃ち、弾は胸に命中した。しかし、彼は死なず、7発も撃たねばならなかった。彼は悪魔同然だったので、なかなか死ななかった。処刑が終わると、人々は通夜もせず、十字架も立てず、動物のように彼を埋めた。

ビルトッチの頭蓋骨は、盗人の身元を突き止めるのに使われる。アンヘラ・カユワは、依頼があると彼の頭蓋骨を掘り出し、「施し」を行った。日中、彼女と依頼人は墓地に赴き、祈りを唱える。それから頭蓋骨を掘り出す。その夜、地面に板きれが置かれ、そのうえに白い布と黒い布が敷かれる。そこに頭蓋骨が置かれ、その前に食べ物、飲物がそなえられる。ビルトッチはカラヤナなので、パンとコーヒーが用意される。ろうそくが消されると、アンヘラが彼に話しかけ、盗人は誰で、盗品はどこにあるか尋ねる。すると彼は、誰々が牛を盗んで食べてしまい、皮はどこそこに捨てられた、などと答える。

アンヘラは、他の死者の頭蓋骨ではなく、ビルトッチの頭蓋骨を使う。というのも、彼は通夜もなにもなしで埋められたので、他の死者にもまして「施し」を必要としているのだから。彼には家族がないので、誰も「施し」をしてくれない。そのため彼は、また盗みがあったら自分の頭蓋骨を掘り出してくれ、自分のことを思い出してく

れ、と言うのである。「施し」を行うと彼は満足し、彼の魂は冷やされ、救われる。

ビルトッチは火で殺されたので、彼は罪を投げ捨て、その罪は死刑執行人にふりかかった。それゆえ、彼の心はきれいである。もし彼がナイフや棒で殺されていたら、彼は罪を背負ったまま死んだのだが、火で殺されたため、彼は清められ、死刑執行人が彼の罪をかぶることになった。

(語り手はサン・ロレンソ在住の57才の男性。インタビューは1996年2月25日と26日、サン・ロレンソの彼の家で行われた。)

証言④

盗人を見つけるには、死者の頭蓋骨を利用する。普通のキリスト教徒の頭蓋骨でもいいのだが、人殺しの頭蓋骨が最適である。人殺しは悪人で、乱暴者で、暴力に慣れているので、この手の仕事にはうってつけである。人殺しは盗人のところに行き、彼を乱暴に揺さぶる。

人殺しには、彼らのことを思い出し、祈りを唱えてくれる人がいない。それゆえ彼らは、とりわけ祈りを必要としている。彼らは煉獄で炎に焼かれており、体を冷やすため、祈りを必要としている。祈りを唱えてやると、彼らは満足する。

ビルトッチは生前、多くの人を殺した。病気になってトリニダで死亡し、墓地に埋葬された。彼は祈りを要求し、その返礼に盗人を見つけ出す。彼は盗人を乱暴に揺さぶり、盗品を返却させる。盗難にあった人は墓地に赴き、ビルトッチに祈りを捧げ、盗品を取り戻してくれるよう依頼する。または、教会に行き、司祭に頼んで、ビルトッチのためにミサを挙げてもらう。そうすると、彼は盗人のところに行き、乱暴に揺さぶる。

ビルトッチに祈りを唱えるとき、その頭蓋骨を掘り出すことはない。彼はトリニダの墓地に埋葬されたが、その墓地は取り壊され、現在では家が立っている。そのため、彼に祈りを唱えるときは、頭のなかだけでそうする。

(語り手はサン・ロレンソ在住の71才の男性。インタビューは1996年2月27日、サン・ロレンソのわたしの下宿先で行われた。)

2.3 記憶の用途

これらの4つの証言に共通する特徴のうち、とりわけ注目すべき点を整理してみよう。

各々の証言はいずれもふたつの部分から構成されている。すなわち、過去に起きた

ビルトゥッチの殺人事件を叙述する部分と、事件の記憶が現在のトリニタリオのあいだでどのように利用されているかを説明する部分である。まずはじめに、ビルトゥッチの殺人事件の叙述に検討を加えてみよう。

すぐに理解されるように、トリニタリオが語るビルトゥッチの伝承の核心は、彼の処刑にある。彼らの証言は、やや例外的な証言④を除いて、すべてビルトゥッチの処刑の模様を詳細かつ劇的に描いている。それに対して、殺人の模様を詳しく伝える証言はひとつもない。トリニタリオにとって、ビルトゥッチが誰をどう殺したかはどうでもいいのであり、彼がどのような最後を遂げたかが重要なのである。

証言から浮かび上がるのは、ビルトゥッチの処刑が、それを見る者に対して特定の効果を与えるために仕組まれたひとつの儀礼的演出である、ということである。処刑が広場の中央という衆目を集める場所で行われたこと、死刑囚と役人がカトリックの聖人行列のように広場を一周したこと、役人が集まった人々に説教を垂れたこと、死刑囚が神に祈りを捧げたことなど、すべてが、処刑がひとつの教訓劇であることを示唆している。そして、その場合の教訓とは、人殺しになってはいけない、この犯罪を繰り返してはいけない、犯罪を犯した者はこの人物のように悲惨な末路を迎える、ということである。

トリニタリオの証言は、ビルトゥッチの異形性を十二分に強調している。彼はもはや人間ではなく、悪魔同然であるという言明が繰り返されている。たしかに、何人もの人を殺し、逮捕しても逮捕しても脱獄を繰り返す彼は、人間の力が及ばない超人性を備えている。男性20人に匹敵する怪力の持ち主で、異常な生命力を持ち、銃弾を何発も受けてもしゃべり続けるというディテールも、彼の怪物性を雄弁に物語っている。実際、証言②の語り手は、ビルトゥッチをウクマリにたとえている。ウクマリとは熊に似た毛むくじゃらの怪物で、山のなかに石の家を構えて住んでいるといわれている。背中に大きな籠を背負い、人間を捕まえてそこに放り込み、誘拐する。誘拐された者は、ウクマリに食べられたり、その伴侶にさせられたりするとい⁴⁾。

証言でとりわけ注目すべき点は、4人の語り手のうち3人が、ビルトゥッチの魂は救済されたと明言していることである。彼らの考えでは、銃で殺された者は、その罪をただちに清算され、天国に行くことができる。そして、殺された者の罪は、彼らを殺した者に転移する。銃で射殺されたビルトゥッチは、処刑の時点で罪を清算され、死刑執行人がその罪を背負ったはずである。その証拠に、ビルトゥッチはアンヘラ・カユワの降霊術にやってくるのではないか、というのである。

殺人という大罪を犯したビルトゥッチが、それにもかかわらず地獄落ちせず、降霊術

にやってくるという謎は、これで一応の説明がつく。彼の罪は清算されたのであり、彼の魂は救済され、天国にいたのである。それゆえ彼は、神のように下界を見渡すことができるし、降霊術にやってくることもできるのである。銃で殺された者がそもそもなぜ罪を清算されるのかという問題については、後ほど詳しい説明を行う。

次に、ビルトッチの記憶がトリニタリオにより現在どのように利用されているかを検討してみよう。彼の記憶の用途は大きくわけてふたつある。

(1) 降霊術で彼の霊を呼び出し、知りたいことを尋ねる。

(2) 彼の頭蓋骨に「施し」を行い、盗人を見つけてもらう。

降霊術についてはすでにその概要を説明したが、頭蓋骨の利用については、若干の解説が必要だろう。

トリニタリオは、盗難にあったときに犯人の身元を突き止め、盗品を取り戻すためのさまざまな方法を持っている。降霊術もそのひとつだが、そのほかにも、聖アントニウスの聖像に祈りを捧げる、ろうそくと針を使う、水を満たした洗面器と鏡を使う、幻覚作用のあるチョウセンアサガオの葉の汁を飲むなどの方法がある。頭蓋骨に祈るのも、そうした方法のひとつである。

使用される頭蓋骨は、誰のものでもいいというわけではない。証言④の語り手は人殺しの頭蓋骨が最適だと言っているが、そのほかにも、原野で行き倒れになって死んだ者、親戚がおらず、祈りを唱えてくれる人が誰もいない者、大昔に死んで身元がわからなくなり、誰もその人のことを思い出してくれない者の頭蓋骨も適している。それらの死者は、「務めを果たす (cumplir)」といわれている⁵⁾。

まずすべきことは、「ミサを買う (comprar misa)」ことである。「ミサを買う」とは、トリニタリオ特有の表現だが、死者の命日、とりわけその3周忌に司祭に依頼して特別のミサを挙げてもらう、または、日曜祝日の通常のミサのおり、司祭に死者の名前を読み上げ、その冥福を祈ってもらうことである。トリニタリオは、いずれの場合にもなんらかの代価を払う必要があると感じている。司祭自身はなにも要求しないのだが、彼らは自分からお金やにわたりの卵などを持ってくるそうである。頭蓋骨に盗人を見つけてもらう場合、3回から6回は「ミサを買う」必要があるといわれている。

ミサを必要な回数だけ買い終わると、いよいよ頭蓋骨に「施し」を行う。まず、お目当ての頭蓋骨を墓から掘り出す必要がある。掘り出した頭蓋骨は黒い布に包んだり、木箱に収めたりして、依頼人の家まで持っていく。その夜、家の床に黒い布を敷き、そこに頭蓋骨を置き、ろうそくを2本灯す。それから、祈禱師に祈りを唱えてもらう。

祈りは1時間から2時間ほど続く。祈りが終わってから、依頼人は頭蓋骨に話しかけ、なにが盗まれたかを説明し、盗人を見つけて盗品を取り返してくれるように依頼する。それが終わるとろうそくを消し、家の者は寢床に就く。すると、暗闇のなか、頭蓋骨が人間の姿に戻り、盗人を探しに出かけていく。死者が立ち上がり、扉を開けて表に出ていく音のはっきり聞こえるという。盗人を見つけた死者は、寝ている彼にかみついたり、体をつつついたり、足を引っ張ったりし、彼が降参して盗品を返しにいくまで責め続けるという。

頭蓋骨のほか、ハプトッキ (japutuqui) の仮面にも同じ効果がある。ハプトッキとは、祭礼に登場する一種の道化役で、片手に投げ縄、片手に木製ののこぎりを持ち、雄牛の仮面をかぶった踊り手を投げ縄で捕らえ、その角を切るしぐさをする。仮面は真っ黒で、トリニタリオは悪魔を表すと考えている。そのハプトッキの仮面にアルコールなどを与えてやると、やはり人間の姿になって、盗人を探しにいくという。

それにしても、いったいどうして、人殺しや行き倒れ、親族のいない者、大昔に死んだ者の頭蓋骨に効果があるのだろうか。この点については、トリニタリオ自身が説明してくれている。それらの死者は、いずれも社会から放逐され、人々から忘れ去られた存在である。彼らには、自分たちのことを思い出し、祈りを唱えてくれる人が誰もいない。それゆえ、彼らはとりわけ祈りに飢えている。そこで、彼らは死者である利点を生かし、盗人探しの仕事を請け負うことで、親戚ではない生者に祈りを唱えてもらっているのである。

トリニタリオの考えでは、人は死ぬと煉獄 (purgatorio) に行き、そこで炎に焼かれ、生前の罪を清めなければならない。煉獄での責め苦はきびしくつらいが、死者の親族が彼らのことを思い出し、彼らのために祈りを唱えてくれると、死者は「冷やされ (refrescare)」、束の間の休息をとることができる。そのおかげで彼らは、煉獄での責め苦を堪え忍び、魂の救済を果たすことができるのである。

死者に祈りを唱えるやりかたはさまざまである。前述の「ミサを買う」こともそのひとつだが、死者の親族が「施し」や「会食」を主催することもある。これは、死者の1周忌の9日間の供養 (novena) の最終日に行われるのが常だが、そのほかにも、親族が必要と感じたときに随時行われる。いずれの場合にも、死者のために食事が用意され、親戚、友人が招待され、祈禱師が祈りを唱える。また、11月1日の諸聖人の祝日には、死者の霊が親族のもとを訪れ、彼らといっしょに一晩過ごすといわれている。そのおり、人々は死者のために食べ物、飲物を持参して教会に赴き、祈禱師に祈りを唱えてもらう。さらに言えば、カトリックの祭礼につきものの「施し」と「会食」

も、そのすべてが死者の冥福を祈るという意義を併せ持っている。それゆえ、トリニタリオのカトリック信仰は、そっくりそのまま死者信仰であるといえる。降霊術と頭蓋骨への「施し」も、非正統的な方法ではあるが、死者に祈りを捧げる機会であることにはかわりはない。

このように、トリニタリオの社会では、生者と死者は強い絆により密接に結ばれている。死者は死後も共同体の一員であり続けており、生者は死者の存在の身近さを、祭礼をはじめとするさまざまな機会に感じとることができる。他方、死者は死者で、死後救済にいたる道を踏みたがえずに歩き続けるためには、生者の協力を切に必要としているのである。

ところが、この救済への道を踏みはずしてしまった死者もいるのである。それが、人殺しや行き倒れ、親族がいない者、大昔に死んだ者などである。彼らはいわば、生者と死者、子孫と祖先の共同体からの落ちこぼれであり、誰も彼らのことを思い出して祈りを唱えてくれないため、煉獄での贖罪を果たせず、地獄落ちの危険にさらされているのである。トリニタリオの死生観では、地獄に落ちて悪魔と化することは、社会から逸脱していることの直接の帰結なのである。悪魔を表すハプトッキがそれらの死者の範疇に含まれるのは、後者自身が悪魔に近い存在であるからにはほかならない。

もっとも、トリニタリオの社会には、落ちこぼれの死者を救済し、共同体に復帰させるための回路がふたつ存在している。ひとつは正統的回路であり、もうひとつは非正統的回路である。

正統的回路は、カーニバルのときの祈りと「会食」である。トリニタリオの集落には、年輩の女性からなる信心講組織（hermandad）が存在する。彼女たちは「アバデサ（abadesa）」と呼ばれており、祭礼において重要な役割を果たす。その彼女たちが、カーニバルの3日間（灰の水曜日直前の日曜、月曜、火曜）、教会で祈りを唱え、集会所で「会食」を催す。この3日間の祈りと「会食」のうち、2日目と3日目のものが死者への「施し」として行われる。その場合の死者とは、原野で行き倒れて死んだ者、カヌーが転覆して溺死した者、ヘビやワニ、ジャガーに襲われて死んだ者、雄牛に突かれて死んだ者、棒で殴り殺された者、行方不明になった者などである。女性たちは、彼らのことを思い出して祈りを捧げ、彼らを救済してくれるよう神に祈るのである。その後に集会所で行われる「会食」も、「彼らの名のもとに」催される⁶⁾。

非正統的回路は、先に説明した降霊術と頭蓋骨への「施し」である。これらの方法は、落ちこぼれの死者の異常性を利用する危険な方法である。それらの死者は、他の死者にもまして祈りを必要としているので、それを得るためなら多少無理な仕事でも

やっつてのける。また彼らは、救済の道からはずれた悪魔的存在なので、盗人を脅し、盗品を返却させるような乱暴な仕事にうってつけである、と考えられている。

もっとも、降霊術と頭蓋骨への「施し」は、彼らを社会的に復権させる方法でもある。というのもそれらは、「義務 (obligación)」や「役目 (cargo)」などの言葉で表現される社会的関係を、死者と生者のあいだにふたたび確立するのだから。証言③の語り手によれば、ビルトゥッチはトリニタリオとのあいだに一種の協定を結んでいる⁷⁾。彼はトリニタリオに、盗難があったら盗人を見つけてやると「約束して (prometer)」おり、その約束を「守る (cumplir)」という。盗人探しは彼の「義務」であり「役目のようなもの」なのである。「役目」とは、カビルドの役職をも意味する言葉である。反社会的存在であるビルトゥッチは、降霊術と頭蓋骨への「施し」を通じて、トリニタリオの社会の一員になったのである。

以上の議論は、なにゆえビルトゥッチがアンヘラ・カウワの降霊術に現れるのかを部分的に説明してくれる。ビルトゥッチは共同体から排除された存在であるからこそ降霊術にやってくるのである。人殺しであり、処刑という暴力的手段により社会から放逐された彼は、誰ひとりとして彼のことを思い出し、祈りを捧げてくれる者を持たない。そのため彼は、トリニタリオとのあいだに協定を結び、盗人の身元を突き止め、紛失物を見つけ出す役目を請け負ったのである。彼は、降霊術にやってくる他の死者にもまして祈りを必要としているため、生者の依頼をより忠実に履行してくれるのである。

3. 歴史資料が語るもの

3.1 殺人事件の再構成

これまでの検討は、ビルトゥッチにまつわる信仰と伝承が、トリニタリオの死生観に依拠するものであることを明らかにしてくれる。しかし、謎解きは始まったばかりであり、まだまだ多くの疑問が残されている。とりわけ、ビルトゥッチが白人であることの意義は、まだ解明されていない。殺人者である彼は、共同体から排除され、救済への道を閉ざされた死者として、トリニタリオの注意を喚起した。しかし、単に落ちこぼれの死者に盗人探しの仕事を請け負わせるだけなら、彼らの「慣習」を共有している先住民の死者を選ぶほうが自然だろう。なぜことさら、白人でありよそ者であるビルトゥッチが、降霊術に呼び出されねばならないのだろうか。公開の銃殺刑というセンセーショナルな出来事が、彼の名を先住民の記憶にとどめたことは容易に想像がつく

が、それだけなのだろうか。なにかより重要な意義が、彼の存在に込められているのではないか。

この章では、現在のビルトッチの伝承からしばらく離れて、歴史を振り返ってみたい。そして、文字記録の検討を通じて、伝承のもととなった過去の事件を再構成してみたい。

もっとも、事件の再構成は不完全である。わたしが利用できた資料は、当時の新聞記事がほとんどで、その大部分が短い言及にすぎない。ペニ県の首都トリニダには、ビルトッチの裁判記録が保管されていたはずだが、県庁の建物を改築する際に過去の資料はすべて処分されたとのことだった。それゆえ、以下の再構成はつぎはぎだらけである。それでもわたしは、いつ起きたかもわからなかったアマゾンの片田舎の殺人事件を復元できただけでも、奇蹟に近いと思っている。わたしがスクレ（チュキサカ県）の国立図書館でむかしの新聞に目を通していたのは、まったく別の情報を探すためだった。たまたま目に飛び込んだ「ビルトッチ (Virtuchi)」という文字が、わたしの脳裏に引っかかっていた不思議な伝承を、記憶に呼び戻したのである。

ホセ・ビルトッチ、これがわれわれの主人公の名前である。彼はロレートの出身で、父親は長年町に住むナポリ人である。つまり彼は、イタリア系移民の息子なのである。ビルトッチという名前は、おそらくベルドゥッチ (Belducci) というイタリア語の姓が、スペイン語読みされたものだろう。

事件は1906年2月19日に起きた。ロレートの町に近いマモレ川沿岸のハユナヘというところで、一家族が皆殺しにされた。殺されたのは、ファン・デ・ディオス・モンタルパン、その妻のアンヘラ・ナバロ、9才になる娘のリベルディナ、そして使用人のレオノール・テラサスである。4人の遺体は、犯行の7日後に発見された。

犯人はただちに逮捕された。ホセ・ビルトッチとロムロ・ウルタドである。後者は前者の使用人で、20才未満の未成年だった。犯行の動機は、検察長官が法務省に提出した6月4日付の報告書では、金銭的トラブルとされている (Callaú 1906: 227-228)。ビルトッチはモンタルパンに50ポリビアーノの借金があり、その返済を渋って彼を殺害した。そして、目撃者を残さないため、家族全員の口を封じた、というわけである。もっとも、死刑執行の前日、ビルトッチとウルタドは供述をひるがえし、カルロス・ポリョックというスコットランド人から殺人を請け負い、その代価としてそれぞれ100ポリビアーノ受け取ったと証言している。

当時、ペニ県は独立した司法管区 (distrito judicial) であり、トリニダには上級裁判所 (julgado superior) が置かれていた。ペニ司法管区は3つの地区 (partido) に

わかれいた。すなわち、セルカド郡とヤクマ郡からなるトリニダ地区、イテネス郡からなるマグダレナ地区、バカ＝ディエス郡からなるリベラルタ地区である（Céspedes 1906: 120; Cronenbold 1910: 26-27）。モンタルバン一家殺人事件はトリニダ地区で発生したため、同地区の判事であるレネ・バルバが審査を担当した。彼は6月26日から29日までの4日間、みずからビルトゥッチとウルタドを尋問した。そして、9月6日、両者に死刑の判決を下した。この死刑判決は、9月22日、ベニ司法管区の上級判事マヌエル・セスペデスによって追認された。

当時のボリビアの司法制度では、共和国大統領が死刑囚に恩赦を与える権限を持っていた。それゆえ、死刑を執行するためには、大統領が恩赦の権限を行使するか否かの伺いを立てる必要があった。ところが、政府所在地のラパスからの返事を待っているあいだ、ビルトゥッチが脱獄するという事件が起きた。11月4日午後のことである。脱獄には共犯者がいた。調べでは、監獄に自由に出入りできたホセ・アパロマという使用人がビルトゥッチにやすりを渡し、後者はそのやすりを使って格子をはずし、脱獄したとのことだった。

もっとも、ビルトゥッチの逃亡は長く続かなかった。というのも、おそくとも12月3日までには、彼は再逮捕されて、監獄に戻っていたのだから。逃亡のあいだ、彼がどこでなにをし、いつどういう経緯で再逮捕されたかは、残念ながら不明である。

他方、ビルトゥッチとウルタドに恩赦を与えないという共和国大統領の決定は、11月上旬に下された。サンタクルス（サンタクルス県）の新聞『ラ・レイ』のラパス在住の特派員は、11月15日付の電報でその知らせを本社に伝えている。ただし、大統領の決定が僻地のトリニダにようやく届くのは、12月3日のことである。

ビルトゥッチとウルタドは12月6日午前、公開の銃殺刑に処せられた。トリニダの新聞『ラ・デモクラシア』は、その模様を詳細に報じている。新聞報道は、劇的な緊張感を帯びている点で、トリニタリオが語るビルトゥッチの処刑の話の思い起こさせる。以下、関連部分を引用してみよう⁸⁾。

その夜、彼ら[ビルトゥッチとウルタド]はぐっすり眠った。夜が明けると、サン・ハビエルから来ていた司祭が、囚人たちに臨終の秘跡を授けにやってきた。彼らはふたりとも、全面的に従順な態度を示した。

9時半、彼らは刑の執行のため引き出されたが、落ち着き払って刑場へと向かった。10時20分前、彼らは椅子に腰を下ろした。司祭が人々に訓話を垂れているあいだ、執行人が囚人を縛った。ところが、目隠しをしようとしたとき、ビルトゥッチは、「このまま死なせて

くれ」と言って抵抗した。しかし、司祭に求められて、目隠しに応じた。

それから、彼らは手に持っていた十字架を渡した。ビルトッチはできるかぎり声を張り上げて、「みなさん、お別れです。永久にさよならです」と叫んだ。それから、銃声が鳴り響き、彼らはそれぞれ4発の銃弾を受けた。

そのとき、ビルトッチは、「もう1発!」と叫んだ。ふたりの兵士が前に進み出た。その間、ロムロは深く息を吸い込み、立ち上がるような仕草をした。兵士たちが、ふたりの胸、モンヘ隊長が指示したところめがけて発砲した。

彼らはまだ息があった。医師のバルガス博士は、まだ生きてると宣告した。犠牲者たちはふたたび動いた。再度、ふたりの小銃兵が進み出て、指示されたところに発砲した。ようやくそのとき、彼らの体は崩れ落ちた。10時2分のことである。

医師がふたたび診察し、死亡を宣告した。誰もが茫然としているそのとき、リゴベルト・フスティニアノ博士が囲いのなかに進み出て、演説を行った。この演説は、日曜日の『ラ・デモクラシア』に掲載される予定である。

かくして、この流血の裁きにより、ベニ県の犯罪は、初めて、その模範が示されたのである。

手続きが規則どおりだったかどうか、裁きが完全な認可を受けていたかどうかは、ここで論じようと思わない。われわれはただ、事実を最大限忠実かつ正確に公表するにとどめておく。

3.2 事件の社会的背景

1906年の事件の社会的背景を整理してみよう。

まずはじめに、ベニ県の特異性にふれておく必要がある⁹⁾。ボリビア共和国は1825年に成立するが、ベニ県はそれよりおくれて1842年、イエズス会ミッションが存在したモホス地方を母胎として創設された。首都はトリニダに定められた。当時、モホス地方は交通網の整備と白人の入植がもっともおくれている地域であり、共和国政府の支配がもっとも及んでいない辺境だった。歴史的にみて、ボリビアの政治経済の中心は常にアンデス高地にあり、アマゾン低地は国土の半分以上を占めるにもかかわらず軽視され続けてきたのである。こうした辺境地域が独立した県に昇格した背景には、アマゾン川水系を経て大西洋に至る交易ルートの開発が、共和国の将来の経済的發展に欠かせないという認識の高まりがあった。共和国政府はベニ県を新設することで、モホス地方を国家機構のなかに組み込み、その経済開発を促そうとしたのである。

モホス地方への白人の入植は、共和国成立後の1830年代から本格化する。当初、政府の役人と専門職が、白人入植者のかなりの部分を占めていた。もともとモホス地方には白人の町は存在せず、イエズス会が建設した先住民の布教区が、入植者が足場を

定めうる唯一の拠点だった。白人はそれらの布教区に住み着き、その特権的支配層を形成し、人口の大多数を占める先住民を次第に周縁的な地位へと追いやっていった。

もっとも、白人の数は少なすぎた。モホス地方は広大であり、その領土を隅々まで支配し、自然資源と人的資源を有効に活用するためには、ひとりでも多くの白人が必要だった。共和国政府は白人の入植を促すため、入植者に無償で土地を与えたり、事業資金を無利子で貸与するなど、さまざまな便宜を提供した。それと同時に、外国人の移民も奨励した。ビルトゥッチの事件に、イタリア人やスコットランド人が登場するのは、そのためである。

19世紀中葉以降、アマゾンの自然資源の国際的需要が高まり、ベニ県の経済的重要性は増していく。まず、1840年代から、マラリヤ治療薬の原料になるキナノキの樹皮の採集が、ベニ県南部のカウポリカン地方とラパス県北部のユンガス地方で行われるようになる。このキナノキ産業は、1850年代中葉までに木が伐採されつくして終結するが、1860年代からブラジルのマデイラ川流域でゴムノキの樹液の採集が開始され、その影響がベニ県に及ぶようになる。1880年以降、ベニ川一帯を中心にボリビア国内におけるゴム産業が本格化する。これらの経済活動の活発化にともない、ベニ県への白人入植者の数は増していき、それにともない地方行政機構も整備されていった。

自然資源の開発と白人入植者の増大は、モホス地方の先住民に深刻な影響を及ぼした。イエズス会が建設した布教区は、キナノキやゴムの産地に近く、数多くの定住民を抱えているため、労働力の主要な供給源となった。先住民は、儲け話に釣られたり、強制されたりしてベニ川やマデイラ川に連れていかれ、過酷な条件のもと、樹皮や樹液の採集人や運搬用のカヌーの漕ぎ手として働かされた。そのため、白人との共存を嫌う先住民は布教区を放棄し、マモレ川以西のサバンナに移住して、新たな町を建設するようになった。サン・ロレンソはこうした町のひとつとして19世紀中葉、トリニダを放棄したトリニタリオにより建設された。

19世紀後半の白人とトリニタリオとの軋轢は、1887年、武力衝突のかたちで表面化する¹⁰⁾。当時サン・ロレンソで展開されたメシアニズム運動を、先住民の不服従の兆候とみなしたトリニダの白人は、首謀者を処罰するため遠征隊を派遣するが、待ち伏せにあって敗退する。その報復として派遣された懲罰軍は、サン・ロレンソとサン・フランシスコを焼き払い、逃げる先住民を追走し、多くの者を殺害した。またトリニダでも、大勢の先住民が反乱に関与した疑いで兵舎に連行され、厳しい拷問を受けた。この事件の記憶はその後長く残り、白人と先住民の関係再構築を困難にした。破壊されたサン・ロレンソとサン・フランシスコは、事件に関与したトリニタリオの手で

1900年代に再興され、白人の統制が及ばない解放区として、1930年代ぐらまで特異な地位を保った。

このように、ビルトッチの事件が起きた20世紀初め、辺境だったモホス地方は共和国の政治経済的機構のなかに徐々に組み込まれ、白人による先住民の支配体制が固められつつあった。もっとも、布教区を放棄した先住民がマモレ川以西に解放区を作っていたことにも示されるように、白人およびその国家の支配が及ぶのはトリニダやマグダレナ、リベラルタなどの一部の町にすぎず、モホス平原の大部分はいまだ国家の統制が及ばない無法地帯だったことも事実である。このことは、ベニ県の司法制度の整備のおくれにはっきりみてとることができる。

ベニ司法管区の上級判事マヌエル・セスペデスと検事デメトリオ・カリャウがそれぞれ法務省に提出した1906年度の年次報告は、県の司法制度が抱えるさまざまな欠陥を指摘している。まずはじめに、判事の数が足りなかった。上級判事と地区判事(juez de partido)のポストは埋まっていたが、予審判事(juez de instrucción)はトリニダにひとりいるだけで、マグダレナ、ビリャ＝ペリャ、リベラルタ、サンタ・アナ、レイエスの予審判事、そしてトリニダの予審判事補佐は欠員のままだった。また、地方判事(juez rural)に至っては皆無の状態だった。「わが国では、地方判事は異国の植物であり、存在する目的もなければ意義もありません」(Callaú 1906: 234)と、カリャウは率直に述べている。判事が足りない理由は、そもそも弁護士の資格を持つ者がベニ県にまれだったからである。判事のポストを埋めるためには、他県、とりわけ隣接のサンタクルス県から弁護士を連れてくる必要があったのである。

次に、裁判所と監獄のための場所と家具が足りなかった。ベニ県の裁判所で専用の部屋を確保していたのは、トリニダの上級裁判所と地区裁判所と予審裁判所だけである。それ以外はどこかの部屋の一角を間借りしていたようである。家具の不足は、上級裁判所を除くすべての裁判所で深刻だった。棚、机、椅子などの基本的な家具すら欠けていた。監獄はマグダレナだけに存在していた。トリニダでは、「駐屯軍の兵舎の1室で、10人も入らないほど小さく、安全を確保できず、非衛生的な部屋」(Callaú 1906: 233)が、監獄のかわりだった。ビルトッチもここに収容されていたと思われる。

当然、囚人の脱走は絶えなかった。ビルトッチが脱走した状況が、当時のベニ県の監獄がどの程度の役割を果たしていたかをよく示している。彼はたやすくやすりを手に入れ、監獄の格子をはずし、白昼堂々逃亡したのである。新聞記事によれば、監視人は午後からトランプのばば抜きに興じ、ハンント・タラガという囚人が彼にかわっ

て監視をしていたという。それもこれも、「ベニではよくある話」だというのだ¹¹⁾。そういう次第なので、ビルトッチは最後の最後まで、その気になればいつでも脱走できると信じていた節がある。実際、処刑の前日、彼が夜になったら脱走するつもりでいるという密告があった。彼の持ち物を検査すると、散髪用のはさみが見つかったので、安全確保のため、彼は別の部屋に移されている。

要するに、1906年当時、ベニ県の司法制度はほとんどともに機能していなかったのである。上級判事のセスペデスは、県の刑事事件処理の現状を次のようにまとめている。

刑事事件については、おもに地方における警察官の不足ゆえ、死刑や禁固刑に値する犯罪が横行しています。手配を受けた者の大部分は、土地の自然環境が逃亡を容易にするため、捕まることはありません。捕まった者も、刑務所がほとんど、またはまるきり堅固でないため、逃げてしまうのです (Céspedes 1906: 121)。

1906年のビルトッチの事件は、ベニ県の司法当局にとり、記念碑的な出来事だった。というのも、それはベニ司法管区において下された最初の死刑判決であり、同管区において執行された最初の処刑なのだから¹²⁾。それは、ベニ県で最初に犯された死刑に値する重罪ではない。そのような犯罪は数多くあったと思われる。しかし、それらはいずれも、司法制度の整備のおくれのため、判決が下され、刑が執行されるまでには至らなかったのである。

ビルトッチの事件は最初から、その社会的注目度において突出していた。女性と子供を含めた一家全員を皆殺しにするという残忍さが、「社会を根底から揺るがせた」(Callaú 1906: 227) のである。事件の注目度は、新聞記事の多さに反映されている。トリニダの諸新聞は裁判の進行状況をこまめに報道し、その記事はそっくりそのままサンタクルスなど他県の新聞に転載されたのである。

このような状況のなか、裁判を結審し、犯人を処罰せよという強い社会的圧力があったことは、想像にかたくない。ベニ県の司法当局は、面目を賭けて事件に取り組まざるをえなかったことだろう。検事のカリャウは、法務省への報告書のなかで、「この事件を最優先し、審理を開始し、できるだけすみやかに判決を下すよう、担当の判事を促す」つもりである、というも、「出来事の重大性と民意がそれを要求している」のだから、と述べている (Callaú 1906: 228)。実際、ビルトッチの裁判は異例なほど早く結審した。ベニ司法管区では、囚人が脱走するのは判決を待ちきれないからだ

いう意見が出るほど、裁判には時間がかかった。結審まで5年、10年かかることはまれではなかった¹³⁾。わずか7カ月弱で判決が出たビルトッチの事件は、例外中の例外なのである。

1906年12月6日の公開処刑は、それゆえ、ベニ県に国家司法というものが存在していることを大々的に示すための絶好の機会だった。それは、国家こそが社会的正義を司っており、必要な場合には断固たる処置を下すということを、一般に知らしめるための儀礼的演出だった。新聞記事が伝える処刑のディテールは、その儀式性を裏づけてくれる。処刑はおそらく、駐屯軍の兵舎のそと、特別に設けられた囲いのなかで行われた。囲いのまわりは見物人がひしめいていた。彼らは、初めて目にする公開の銃殺刑を、息を殺して注視したことだろう。刑の冒頭にはカトリックの司祭が説教し、刑の終わりには政府の役人が演説して、この儀式のメッセージを観衆に解説した。『ラ・デモクラシア』に掲載が予告されている後者の演説は、残念ながらわたしの手元がないが、その内容はおおむね推察できよう。別の新聞は、「処罰は過酷だが、見せしめの必要があった」と、処刑の意義を簡潔に要約している¹⁴⁾。

4. 国家儀礼とその転覆

4.1 銃殺と贖罪

本稿の議論をこれまで導いてきた作業仮説は、トリニタリオが語るビルトッチの伝承は、彼らが外来者である白人と関係を取り結ぶその境界線上で成立したものであり、白人とその文化が彼らに与えたなんらかの衝撃がその中核に存在する、というものだった。この章では、歴史資料から判明した事件の経緯を踏まえて、もう一度トリニタリオの伝承を検討してみたい。歴史資料が語る事件の経緯とトリニタリオの伝承とを突き合わせ、後者が前者に加えた解釈や変更注目すれば、先住民がビルトッチの事件をどのように受け止め、そこからどのような教訓を引き出したかを解明できるかもしれない。

歴史資料と現在の伝承は、いずれもビルトッチの処刑を事件のかなめに位置づけている。トリニタリオの伝承は、紹介した4つの証言のうち3つが処刑の場面を詳しく描いており、殺人の場面はほとんど無視されている。歴史資料も同様に、事件の社会的意義が殺人よりも処刑にあることを示唆している。たしかに、ビルトッチの殺人はその残忍さにおいて際立っており、それゆえ社会的注目を集めた。しかし、それ以上

に彼の事件を記念碑的なものにしてしているのは、ベニ県最初の死刑判決であり死刑執行であるという事実なのである。

実際、歴史資料を検討するかぎり、ビルトゥッチとトリニタリオとの接点は処刑の場にしかない。ビルトゥッチ自身はトリニタリオでないし、被害者もそうではない。彼を裁いたのは白人の判事からなる白人の法廷である。証言③の語り手が主張するように、ビルトゥッチが逃亡中トリニタリオと接触したというのは、ありえないことではない。しかし、このエピソードは他の証言にも歴史資料にも出てこない。したがって、その真偽を確認するすべはない。

おそらく、トリニダで行われたビルトゥッチの公開処刑には、白人のみならず大勢のトリニタリオが詰めかけたのだろう。後者は、初めて目にするこの国家儀礼を多大の関心を持って注視し、それに心を動かされ、そのありさまを後世に語り伝えたのだろう。そうだとすれば、トリニタリオの伝承は、1906年の事件の波紋の現在における名残ということになる。

先に紹介した4つの証言をもう一度検討してみよう。すでに指摘したことだが、トリニタリオの伝承はビルトゥッチの処刑の儀式性をよくとらえている。もっとも、その儀式性は、彼らの「慣習」に合致するように解釈しなおされている。伝承では、処刑の舞台は駐屯軍の兵舎ではなく、カトリックの祭礼が催される中央広場に移されている。そして、死刑囚と役人は、あたかも聖人行列のように広場を一周させられている。証言①の語り手は、役人が広場の四つ角で立ち止まり、見物人に説教を垂れるというディテールまで付け加えている。実際、聖人行列のおりには、一行は広場の四つ角で立ち止まり、祈禱師が祈りを唱え、楽士が楽曲を演奏するのである。

儀式のメッセージはどう伝わっているだろうか。トリニタリオは、ビルトゥッチの銃殺が単なる殺人ではなく処刑であること、すなわち公的権力が不正行為を犯した者に対して一定の規則に則って加える処罰であることを十分理解している。それゆえ、伝承においてビルトゥッチを抹殺する主体は、「カビルド役人 (cabildenos)」、「警察 (policia)」、「警吏 (guardia)」など、公的権威を帯びた者とされている。トリニタリオはまた、公開処刑の意義もよく理解している。それは、犯罪者の処罰にとどまらず、一般の人々に対する見せしめであり、同じ犯罪が繰り返されないための予防処置なのである。

トリニタリオが語るビルトゥッチの処刑は、公共性のみならず、宗教性すら帯びている。それは、宗教的な意味での罪を背負った者を地獄に送るための手続きであり、神の審判の現世における予行なのである。伝承における役人とビルトゥッチの対決は、カ

トリックの教訓劇にしばしばでてくる聖人と悪魔の対決を思わせる。植民地時代、宣教師はキリスト教の教義を先住民にわかりやすく教えるため、宗教的なモチーフの劇を彼らのあいだに広めた。そのプロットのひとつが、聖人と悪魔が対決し、前者が後者を打ち負かすことで信仰の勝利がたたえられるというものだった。実際、伝承のなかのビルトッチは「悪魔同然」の存在であり、その悪魔性をいかに発揮している。彼は怪力の持ち主で、人知を超越し、不死身の生命力を備えている。最後に彼が打ち負かされたとき、人々は邪術師に対してそうするように、通夜も十字架もなしにその遺体を埋めた。地獄行きを約束されている者に対して、カトリックの祈りは不要なのである。

それゆえにこそ、ビルトッチの魂が救われたというトリニタリオの言明は、ことさら奇妙に思われる。彼の処刑は、公共の秩序を乱した者を処罰し、宗教的罪人を地獄に送るための正当な手続きだったはずである。ところが、まさにその手続きの結果、ビルトッチの罪は清算され、彼の魂は天国に行ってしまったというのである。いったい、なにがどうまちがっていたのだろうか。

トリニタリオによれば、問題はビルトッチを銃で射殺したことである。ナイフで刺し殺すか、棍棒で殴り殺していれば、彼はその罪にふさわしく地獄に落ちていたはずである。ところが、銃で射殺したため、奇妙なトリックにより、彼の魂は救われ、彼を処刑した者が彼の罪をかわりに背負うことになってしまった。銃のような火器で殺された者はみな、罪を清算されて清くなり、殺害者がその罪を背負うのである。

火器が罪人を清めるという考えは、トリニタリオのあいだで一般化している。わたしは、ビルトッチの処刑以外のコンテキストでも、この考えが表明されるのを聞いたことがある。1995年7月、インボロ＝セクレ地域のトリニダントで調査をしていたとき、ひとりの男性がわたしに邪術師の殺し方を説明してくれた¹⁵⁾。彼によれば、邪術師は猟銃などの火器で殺してはいけない。そうすれば、邪術師の魂は救われて天国に行き、彼を殺した者が、彼のかわりに地獄に落ちてしまうのだから。それゆえ、邪術師は棒で殴り殺すか、溺死させなければならない、というのである。

それでは、なぜ火器が罪人を清めるのだろうか。この点については、証言②の語り手がわたしにたいへん明解な説明をしてくれた。「火器 (arma de fuego)」は「火 (fuego)」の一種であり、それゆえそれは、死者が生前の罪を清める煉獄の炎と同じ効果がある、というのである¹⁶⁾。火と贖罪の関係が理解できないわたしに対し、彼は子供に道理を説くような口調でこう言った。「だからさ、火だよ、カルメンの聖母が守っているあれだよ。死んだ者はあそこに行って、罪を清めるのさ」。この説明を聞

いたとき、わたしは銃と贖罪の炎というトリニタリオにしか思いつかないだろう連想に感嘆し、目からうろこが落ちる思いだった。彼らの考えでは、火器で罪人を殺すことは、通常の死者が煉獄で長年かかって成し遂げる贖罪を、いっきに達成してしまうのである。

当然、火器だけでなく、火一般が同じ効果を持つ。実際、証言②の語り手は、殺人犯を銃で射殺するかわりに、生きたまま火で焼き殺しても、その魂は救われる、と主張している。さらに彼は、電気椅子による処刑も、もしかすると同じ効果があるかもしれないと疑っていた。彼はサンタクルスに行ったとき、テレビの番組で電気椅子による処刑の様態を見たらしい。もし彼の説が正しいとすれば、天国にはさぞかし罪人が多かろう。

もっとも、わたしの考えでは、彼の説明は全面的に満足のいくものではない。それは、ビルトッチの伝承の本質の一端を開示しているのだが、ひとつ重要な要素を見落としている。その要素とは、火で殺された者の罪は消滅するわけではない、ということである。彼らの罪は、彼らを殺した者に転移するのである。それゆえ、現世における火による贖罪は、煉獄でのそれと異なり、みせかけだけのいかさまということになる。罪は消えずに残り、誰かがその負債を負わねばならないのである。ひとり天国に行くかわりに、ひとり地獄に落ちるのだから、天国行きと地獄行きの収支決算に変わりはない。神の観点からすれば、帳尻は常に合っているのである。

そのように考えると、火一般が罪を清算するという言明は、そのまま受け入れることができなくなる。火で殺された者の罪は、殺した者に転移するかぎりでは清算されるのだから、殺人という枠組みはあくまでははずせないのである。野火に焼かれて死んだ者の罪は、誰も肩代わりしてくれないだろう。それゆえ、火器は煉獄の炎と同じ効果があるゆえビルトッチは救われたという説明は、問題の一面しか見ていない不十分なものなのである。

もっとも、証言②の語り手の説明は、ある一点においてたいへんすぐれている。すなわち、彼の説明は、殺人犯の銃殺という世俗的な事象を贖罪という宗教的な事象にいっきに連結するという離れ技をやっているのだからである。そうすることで彼は、ビルトッチの伝承が実は裁きと救いをテーマにした宗教的な物語であることを、わたしに気づかせてくれたのである。

4.2 国家による司法的正義の独占

わたしの考えでは、ビルトッチの伝承は、国家が主催する処刑という罪の裁きをど

のように受け止めるかということにかかわっている。問題になっているのは、火そのものでも、火を使った殺人一般でもなく、処刑という形式である。火で殺すことと罪人の罪を清めることの接点は、そこにしかない。さらに言えば、真の問題は、処刑そのものというより、処刑という儀式を通して表明される国家による司法的正義の独占である。国家こそが罪を裁き、それを赦すのだというメッセージこそ、1906年にビルトッチの処刑を目撃したトリニタリオにとって、決定的に新しいものだったのである。

おそらく、トリニタリオの伝承において火が持つとされる罪を清める力は、処刑という贖罪の儀式において発現される国家の権力が、銃という象徴的な小道具に具象化したものである。ものを操る人間の作用が、ものそのものの作用に転化する具象化のプロセスは、伝承の世界ではめずらしくないだろう。ビルトッチを処罰し、その罪を赦した銃は、国家権力のフェティッシュなのである。

一般に、近代以降の西欧諸国の司法制度は、その他の諸社会の司法制度と比較すると、次のふたつの特徴を備えている。

(1) 私人による私的制裁の禁止。すなわち、国家が裁判と処罰の権利を独占し、私人による自己救済や復讐、私闘を禁止すること。

(2) 司法の脱宗教化。すなわち、国家がいかなる宗教的権威にも依存せず、独自の基準に基づいて不正行為を裁くこと。

近代国家の司法制度は、私人がみずからの判断で自分に加えられた侵害行為を裁き、加害者に報復することを禁じている。裁判と処罰の権利はあくまで国家の司法機関に属しており、私人にはない。後者は、自分に対して不正行為が犯されたときでも、まず国家機関の判断を仰ぎ、制裁を代行してもらわねばならないのである。実際、私人の自力救済が公的権力の存立を危うくするという考えは、西欧の社会思想の伝統の一部である。この考えの古典的な表明は、たとえば、トマス・ホッブズの『リヴァイアサン』にみられる。ホッブズによれば、主権者が保持する処罰の権利は、国家を構成する各人が「かれら自身のもの〔処罰の権利〕を放棄することによって、主権者が、かれら全体の維持のために適当だと思う通りに、かれ自身のものを用いるのを強めた」ことの帰結なのである(ホッブズ 1974: 204-205)。

近代国家の司法制度のふたつめの特徴は、その脱宗教性である。西欧における脱宗教化の対象は、むしろキリスト教である。キリスト教は、原罪と神の審判を教義の中心に据え、十戒をはじめとする固有の法を備えている。キリスト教はそれ自体ひとつの司法体系としての性格を帯びており、事実、歴史上の一時期にはそのようなものとして機能した。西欧諸国の司法制度はその基本的原理の多くをキリスト教に負ってい

るのである。しかしながら、近代以降、政治は宗教と異なる基盤のうえに自己を確立するようになり、その結果、キリスト教的司法はその適応範囲を来世に限定されるに至ったのである。

世俗的国家による司法的正義のこのような独占は、近代以降の西欧諸国で進行したプロセスであり、西欧の植民地主義的拡張を契機として、非西欧にも波及したものである。モホス地方においては、近代的司法機構の確立は、ペニ県が創設された19世紀中葉以降、重要な課題として取り組まれるようになった。前章で論じたペニ司法管区の整備は、その具体的あらわれである。司法制度の整備は、白人の入植と彼らによる政治経済の統御、および先住民の従属化と並行して進められた。というより、司法制度の整備それ自体が、白人とその国家が先住民固有の罪の観念や裁きの様式、紛争解決の方法の有効性を否定し、一切の司法的正義を自分たちの統御のもとに置こうとする試みだった。それゆえそれは、先住民の側からの否定的な応答を招かずにはいなかったと思われる。

それでは、モホス地方の先住民社会では、どのような行為が罪とみなされ、どのような裁きが下され、どのような処罰が執行されてきたのだろうか。彼らの司法は、これまで説明してきた近代国家の司法とは、どの点で異なっているのだろうか。

現在のトリニタリオの社会は、ボリビア共和国の諸機構に組み込まれており、国家の司法機関の統制を受けている。とりわけ、トリニダやサン・ロレンソ、サン・フランシスコなど、白人との共存を余儀なくされている集落では、裁判と処罰の権利は白人の手に握られている。殺人をはじめ、公共の秩序を脅かす重大な犯罪は、警察や裁判所など白人社会の司法組織が管轄している。もっとも、先住民独自の司法も、国家司法の規制が及ばない領域でいまだ機能している。とくに、警察が取り上げない軽犯罪や、邪術のような先住民特有の犯罪は、先住民の裁量に委ねられている。

トリニタリオのあいだで現在機能している司法には、次のふたつの形態がある。

(1) 私人による私的制裁

(2) 先住民の代表組織であるカビルドによる公的制裁

私人による私的制裁は、目には目を、歯に歯を、を基本原理にしている。すなわちそれは、相手から加えられた損害を相手に償わせる、または同じ被害を相手に加えることから成り立っている。そのもっとも頻繁にみられる事例は、盗みと邪術である。

トリニタリオのあいだで盗みが発生すると、どうなるか。まず、盗難の被害者は犯人の身元を突き止めようとする。前述のように、犯人を見つける方法はたくさんあり、それらはしばしば超自然的な力にかかわっている。犯人の身元が判明すると、被害者

は盗品の返却を要求し、返却が不可能な場合には弁償を要求する。後者の場合、盗品と等価のものを譲り渡すか、お金がある場合にはそれで支払うことが求められる。要求が拒まれると、被害者はふたたび超自然的な力を使って圧力をかけたり、カビルドに仲介を依頼したりする。盗人が犯行を認めて弁償を済ますと、それで一件落着となる。

邪術の場合も同様である。原因不明の病気を患う者や、不可解な病気や事故で近親者を亡くした者は、霊媒師に頼んで死者の霊を呼び出してもらい、病気や死の原因を聞き出す。原因が邪術にあるとわかり、邪術師の正体が判明すると、被害者は別の邪術師を雇って、彼らが受けたのと同じ被害を加害者に加えようとする。それゆえ、邪術は次から次へと伝染する性質を持つ。邪術による遺恨が幾重にも重なってしまうと、紛争の解決はたいへんむずかしくなる。

先住民組織のカビルドは、私人の私的制裁において、仲裁機関の役割を果たしている。すなわち、当事者が話し合いで紛争を解決できないとき、双方の訴えを聞いて、両者が納得するような解決策を提案するのである。またカビルドは、かつては共同体全体の利益を代表する機関として、強権的な制裁も実施していた。現在のカビルドは、政治経済的役割の多くを白人に奪われており、司法機関として十全に機能しているとはいいがたい。しかしかつては、どこの集落でも、カビルドが治安維持を司っていた。年輩の人々の話では、むかしのカビルド役人はいまよりはるかに大きな権力を持っており、常時むちを携帯し、集落を巡回して不正行為を犯した者を容赦なく処罰したそうである¹⁷⁾。

トリニタリオの証言では、むかしのカビルドは、キリスト教的規範に基づいて不正行為を取り締まっていた。不正とみなされた行為は、殺人や盗み、姦通、怠惰など、十戒に反するものや七大罪に属するものである。そのほか、ミサの最中に私語を交わす、聖金曜日の断食を守らないなど、宗教的規律に背く行為も処罰の対象だった。そもそもカビルドは、世俗の機関であるのみならず、祭礼執行を責務とする宗教的機関でもあり、その権威の大部分を宗教に依存している。カビルド役人の任命は毎年1月1日、司祭の監督のもと教会で行われ、その権威を象徴する杖 (vara) はキリストの身体を表すといわれている。それゆえ、カビルドの司法機能も、神の道から逸れないように人々を監督し、指導することに存していたのである。

このように、先住民社会の司法は、西欧諸国に由来する近代的司法とは根本的に異なる特徴を備えている。先住民の司法は私人の自己救済の権利を尊重し、公的機関には仲裁者としての役割を割り振っている。それに対して、近代的司法は私人の手から

裁判と処罰の権利を取り上げ、それを国家機関に集中させようとする。また、先住民の司法はキリスト教的規範に全面的に依拠しており、それを現世において批准している。それに対して、近代的司法はキリスト教の影響を徹底的に排除し、宗教に依存しない公的権威を確立しようとするのである。

ビルトゥッチの処刑が行われた20世紀初めのモホス地方は、白人植民者が持ち込んだ近代的司法と先住民固有の司法が対峙する場だった。そして、ビルトゥッチの処刑自体は、白人とその国家が同地方における裁判と処罰の権利を独占する意図を宣言するものだった。前述のように、彼の刑事事件はベニ司法管区が初めて下した死刑判決であり、初めて執行した処刑だった。それゆえそれは、モホス地方における近代的司法機構の確立を祝う国家儀礼としての性格を備えていた。それは、それ以後国家が不正行為を裁き、処罰を実行するということの儀礼的表明だったのである。

それでは、トリニタリオはこの国家儀礼をどのように受け止めたのだろうか。

すでに述べたように、トリニタリオはビルトゥッチの処刑を、私人による復讐ではなく、公的権力による犯罪者の処罰であると正しく理解している。実際、ビルトゥッチの処刑が被害者による私的制裁でないことは明白だった。彼を裁いたのは殺害されたモンタルバン一家とはなんの関係もない人々であり、それらの人々は一家が殺されたことで生じた損害の賠償を彼に求めたわけではない。処罰の執行者は、私人としてではなく、あくまで公的権威の体现者として処刑を実行したのである。

ところで、トリニタリオにとって、公的制裁とは宗教的制裁以外のものではありえない。宗教性を排した公共性の概念は、彼らには異質なものである。彼らはそれゆえ、ビルトゥッチの処刑を、罪の償いと魂の救済という宗教的な物語として解釈せざるをえない。その解釈によれば、ビルトゥッチはキリスト教的規範に背くような罪を犯したため、神の権威のもと地上におけるその代理人により罪を償わされたのである。彼の銃殺刑を煉獄の炎による贖罪と同一視する証言②の語り手の解釈は、そのもっとも顕著な例である。

実際、トリニタリオはビルトゥッチの処刑が彼の「罪 (pecado)」を裁くものであると明言している。「罪」という概念は、私的制裁にかかわるものではなく、公的制裁にかかわるものである。侵害行為の加害者が被害者に対して「罪」を負うことはありえない。そのことは、加害者が被害者に弁償を済ませても彼らの「罪」は消えないことから明らかである。「罪」とはあくまで道徳や法律のような絶対的基準に照らして不正と判断された行為にかかわるものなのである。また、トリニタリオの伝承が言及するビルトゥッチの「罪」は、あくまでキリスト教的な意味で解釈されるべきであり、

近代的司法におけるように、反公共性という脱宗教的な意味で解釈されるべきではない。なぜならそれは、彼の魂の救済に直接かかわっているのだから。

しかしながら、このような宗教的解釈にそぐわない要素が、ビルトッチの処刑にはある。それは、罪人の罪を裁き、赦しを与える主体が、神の代理人である司祭やカビルドではなく、白人の役人である、という事実である。後者は、トリニタリオにとって、無信仰の代名詞のような存在だった。当時のモホス地方の白人植民者は、トリニタリオの「慣習」を時代おくれの迷信であり、彼らの進歩を妨げる障害物であるとみなして、攻撃を加えていた。たとえば、19世紀末には、ベニ県庁がトリニダの先住民がカトリックの祭礼を祝うことを禁止したため、多くの者が反発して町を去り、マモレ川以西のサバンナに移住するという事件が起きている¹⁸⁾。それから1世紀以上たったわたしの調査時でも、年輩のトリニタリオは、白人が彼らの「慣習」をあざわらい、その遵守を妨害してきたことを繰り返し語っている。

たしかに、ビルトッチの処刑において、教会の関与がまったくなかったわけではない。先に紹介した『ラ・デモクラシア』の記事によれば、死刑囚には司祭が付き添い、彼らの魂の救済のために祈りを唱えている。もっとも、それはあくまで付け足しにすぎない。白人の判事が下した判決、駐屯軍の兵舎への囚人の監禁、兵隊による死刑執行、医師による死亡宣言、役人の演説、それらすべてが、処刑の儀式は白人の官僚と軍人が演出したものであり、そこでは彼ら自身が主要な登場人物を演じているということを示していたのである。

結論を述べよう。わたしの考えでは、トリニタリオにとっての1906年の事件の衝撃は、白人とその国家が罪を裁く者として神になりかわろうとしている、という点に存していた。トリニタリオにとって、罪を裁く権利は神のみに属する。人間ができることは、神の裁きを現世において批准することであり、さもなければ、加害者から被った被害を相手に償わせることである。しかし、ビルトッチの公開処刑は、それ以後国家が人間の罪を裁き、処罰を下すのだということを高らかに宣言していた。それゆえその処刑は、トリニタリオには、神の占有事項に手を出す許しがたい越権行為と映ったのである。

だからこそ、ビルトッチを裁こうとする白人の試みは失敗するのである。彼らの失敗は二重である。第一に、彼らの裁きは殺人犯を地獄に落とすかわりに天国に送り込んでいる。第二に、殺人犯の罪は清算されずに残っている。一見すると、ビルトッチは贖罪の炎に焼かれるかわりに銃弾を浴び、そうすることで、その罪を清算したかに見える。しかし、実際には彼の罪は消滅せず、国家の代理人である死刑執行人に転移

している。地獄に落ちたのは、不遜にも神の占有事項に手を出すという危険な火遊びをした国家の側なのである。国家の裁きは、所詮人間の裁きであり、神が司る世の中の秩序を変えることはできない。ビルトゥッチはたしかに天国に行ったが、死刑執行人が彼にかわって地獄に落ちた。それゆえ、天国行きと地獄落ちの収支決算になんら変更はないのである。

要するに、白人とその国家が演出したビルトゥッチの公開処刑は、トリニタリオにとって、神の裁きのパロディーであり、その失敗した模倣なのである。白人は不遜にも神になりかわって人間の罪を裁こうとした。しかし、罪を裁く権利は神のみに属するものであり、彼らの行為は身のほど知らずの越権行為にほかならない。それゆえ、その試みは当然のごとく失敗し、彼らはそのつけを支払わねばならなかったというわけである。

5. おわりに

本稿の目的は、「カラヤナ」で「人殺し」であるビルトゥッチが、なにゆえトリニタリオの降霊術にやってくるのかという謎を解くことだった。ポリビア・アマゾンの一村落でたまたま耳にした伝承から、近代国家における集権的司法機構の確立まで、寄り道や迂回を含めてずいぶん長い道のりを辿ったが、最終的に、ビルトゥッチにまつわる疑問におおむね納得のいく解答を与えることができたであろう。

前述のように、ビルトゥッチがトリニタリオの降霊術にやってくるのは、彼が共同体から排除された存在だからである。殺人者として指弾され、処刑という暴力的手段により社会から放逐された彼は、誰ひとりとして彼のことを思い出し、祈りを捧げてくれる者を持たない。そのため彼は、トリニタリオと契約を結び、盗人の身元を突き止め、紛失物を見つけ出す仕事を請け負ったのである。そして、その代償としてキリスト教の祈りを受け取り、魂の浄化を果たそうとしているのである。

もっとも、前章の分析が示しているように、トリニタリオとビルトゥッチとの関係は、一対一の閉じたものではない。そこには、白人という第三者が関与している。白人の存在は、トリニタリオの伝承では明白に示されていないが、その不在自体が実は重要なのではないかと、わたしは考えている。

ビルトゥッチはもともと白人社会の一員だったが、殺人者として処刑されることで、彼らの社会から暴力的に排除された。白人と彼らの国家は、正義の裁定者として神になりかわり、罪人のビルトゥッチを地獄に送り込もうとした。しかし、神ならぬ彼らは

その試みに失敗し、みずからが地獄に落ちてしまった。地獄に落ちるはずだったビルトッチは、白人たちが彼の罪をかわりに引き受けてくれたおかげで、思いがけず天国に行くことになった。他方、トリニタリオは、魂の浄化のために祈りを必要とするビルトッチと利害の一致をみた。そして、彼にキリスト教の祈りを捧げてやるかわりに、盗人の身元を突き止め、盗品を取り戻す仕事を彼に請け負わせた。トリニタリオはビルトッチと契約を結び、社会から逸脱した存在だった彼を、ふたたび魂の救済へ至る道に復帰させたのである。

こうしてみると、ビルトッチという存在は、トリニタリオが白人とのあいだに対照的な関係を取り結ぶための媒介項の役割を果たしていることがわかる。トリニタリオはビルトッチと契約を結び、彼が天国に行けるように後押ししているが、実は彼の天国行きは、彼を排斥した白人社会全体の地獄落ちを前提にしているのである。ビルトッチが地獄に落ちるべき悪魔的存在なら、その悪魔を降霊術で呼び出し、彼と契約と結ぶトリニタリオも、地獄落ちを免れないだろう。しかし、ビルトッチの罪が清算され、その魂が天国に行けるのなら、それは、彼の罪を肩代わりした白人とその国家が、神になりかわろうとした越権行為ゆえに地獄に落ちるからなのである。つまり、トリニタリオと白人は、ビルトッチという存在を媒介にして、天国行きと地獄落ちのシーソーゲームを競っているのである。

前述のように、ビルトッチという白人の殺人者の記憶を、トリニタリオの現在の用に役立てることを思いついたのは、アンヘラ・カユワである。おそらく、彼女以前にも、トリニタリオのあいだでビルトッチのことが知られており、彼の魂の救済が信じられてはいただろう。しかし、彼の魂を呼び出し、盗人探しをさせようという発想は、いまだなかったのではあるまいか。

アンヘラ・カユワはサン・ロレンソに生まれ、そこで降霊術を行っていたが、彼女の術を悪魔崇拝とみなす白人から度重なる迫害を受け、町を去って放浪の生涯を送るようになった。アンヘラがビルトッチに注目するに至ったのは、彼女のこうした経歴と関係しているかもしれない。つまり彼女は、ビルトッチを媒介にして、白人が彼女に投げつけた非難を、白人自身に投げ返そうとしたのかもしれない。白人は彼女が呼び出す霊を悪魔呼ばわりし、彼女の降霊術を悪魔崇拝として指弾する。しかし、彼女にしてみれば、降霊術にやってくる霊こそ天国行きを約束されており、やってくることができない霊は地獄で悪魔に責め苛まれているのである。それゆえ、ビルトッチのみが降霊術にやってくることは、彼以外の大勢の白人が死後、地獄に落ちたにちがいないことを示しているのである。ビルトッチは降霊術にやってくるたったひとりの白

人であり、しかも白人社会から地獄落ちを宣言された者である。その彼だけが救済されたということは、その他の白人の地獄落ちを証明しているのである。

ビルトゥッチという存在がアンヘラ・カユワの、そしてその他大勢のトリニタリオの心を捉えたのは、こうした理由からだと思われる。実際、キリスト教の祈りを求めて降霊術にやってくるただひとりの信心深い白人が、実は人殺しであり、その他の白人により地獄に放逐された者だったというのは、なんとという痛烈な皮肉だろうか。

1990年代中葉にわたしが調査を行ったとき、アンヘラ・カユワはすでに亡く、彼女の後を継いで降霊術を行う者もいなかった。降霊術の記憶はいまだ生々しかったが、多くのトリニタリオがその真実性に疑いをはさんでいたのも事実である。白人の居住区域から遠く離れたベニ県南部のインボロ＝セクレ地域では、キリストがトリニタリオのために用意した「聖地 (tierra santa)」を探索するメシアニズム運動との関連で、幼女の霊媒師が数名いるといわれている。しかし、彼女らの方法はこれまで述べてきたものとは大きく異なっており、死者の霊も呼び出されることはない¹⁹⁾。

歴史を振り返ると、トリニタリオの降霊術は、少なくとも1世紀は続いてきたことがわかる。16世紀のスペイン人到来以前の類似の慣習は別として、彼らの降霊術が最初にはっきりそれとわかるかたちで記録に見出されるのは、19世紀末のことである²⁰⁾。それから1世紀あまり、さまざまな紆余曲折はあっただろうが、降霊術は常に存続してきたと思われる。少なくとも、アンヘラ・カユワが死去する1980年代前半までは。今後、トリニタリオのあいだで死者の霊がふたたび呼び出される機会が来るかどうか、彼らの「慣習」の急激な変化を思うと、否定的にならざるをえない。

わたしのインフォーマントのひとり、アンヘラが白人の迫害を受けてサン・ロレンソを去った後、もはや誰もビルトゥッチのことを思い出さず、彼の頭蓋骨を掘り出して「施し」を行うこともなくなった、と述べている²¹⁾。「それで、彼 [ビルトゥッチ] の義務も終わりになったのさ」、と彼は言っていた。もっとも、彼は付け加えて、たとえトリニタリオがビルトゥッチを忘れても、ビルトゥッチはトリニタリオを忘れず、ふたたび「施し」を受けるべく、いまでも呼び出しを待っている、とも言っていた。ビルトゥッチは、霊媒師がいなくなった現在でも、トリニタリオがふたたび彼のことを思い出し、彼の霊を呼び出してくれるのを辛抱強く待ち続けているのである。

はたして、その日がいつ来ることはあるだろうか。あるとすれば、それは、歓迎すべきことなのだろうか。それとも、憂えるべきことなのだろうか。わたしには答えが出せそうにない。

謝 辞

本稿の基礎となったボリビア共和国での調査、および帰国後の資料整理は、以下の諸機関の資金援助により可能になった。国際文化教育交流財団1992年度日本人海外派遣奨学金（1993年4月～1996年3月）、文部省平成9年度在外研究員（中核的研究機関支援プログラム）派遣事業（1997年7月～1997年10月）、トヨタ財団1997年度研究助成A（1998年11月～1999年4月）。

ベニ県モホス郡でのフィールド調査に際して、サン・ロレンソとトリニダントの住民の方々にたいへんお世話になった。また、本稿で使用した歴史資料は、主としてスクレのボリビア国立文書館・図書館（Archivo y Biblioteca Nacionales de Bolivia）の協力のもと、同館で収集した。

国立民族学博物館第111回館内合同研究会（1998年2月19日）において、本稿とほぼ同じ題目で口頭発表を行ったとき、出席者の方々から貴重なコメントをいただいた。

以上、記して深く感謝の意を表する。

注

- 1) サン・ロレンソ（ベニ県モホス郡）在住の55才の女性の証言。インタビューが行われた場所と日時は以下のとおり。San Lorenzo, 11/II/1996.
- 2) トリニタリオは「ビルトゥッチ」と呼んでいる。歴史資料の表記は、Bertuchi, Vertuchi, Birtuchi, Virtuchi, Bertuche などさまざまである。本稿ではビルトゥッチ（Virtuchi）で統一する。
- 3) アンデス高地の殺人鬼の伝承については、以下を参照せよ。加藤 1991; Morote Best 1988: 153-177; Wachtel 1992: 71-132.
- 4) 類似の伝承はラテンアメリカに広く分布している。Barnadas 1990: 169-184; Morote Best 1988: 179-239 を参照せよ。
- 5) サン・ロレンソ在住の55才の女性の証言。San Lorenzo, 28/II/1996.
- 6) サン・ロレンソ在住の68才の女性の証言。San Lorenzo, 4/III/1996. および、サン・ロレンソ在住の45才の男性の証言。San Lorenzo, 4/III/1996.
- 7) San Lorenzo, 26/II/1996.
- 8) El Trabajo (Santa Cruz), no. 101, 23/I/1907. La Democracia (Trinidad) の記事の引用。
- 9) ベニ県の歴史については、以下を参照せよ。Block 1994: 149-173; Carvalho Urey 1975; 1983: 26-50; Greever 1987: 31-112; Limpas Saucedo 1942; René-Moreno 1974: 11-85.
- 10) 1887年の事件については、Arteche 1989; René-Moreno 1974: 75-80, 388-391; Suárez 1887 を参照せよ。また、Los Debates (Sucre), El Heraldo (Cochabamba), La Ley (Santa Cruz), La Estrella del Oriente (Santa Cruz) の各紙にも、関連記事が豊富にある。
- 11) El Beni (Trinidad), no. 26, 11/XI/1906.
- 12) El Trabajo (Santa Cruz), no. 70, 6/X/1906. Ibid, no. 101, 23/I/1907.
- 13) La Democracia (Trinidad), no. 396, 29/IV/1911.
- 14) La Abeja (Santa Cruz), no. 277, 18/I/1907.
- 15) トリニダント在住の61才の男性の証言。Trinidadito, 22/VII/1995.
- 16) San Lorenzo, 29/II/1996.
- 17) トリニダント在住の推定年齢70才の男性の証言。Trinidadito, 9/VII/1995. および、トリニダント在住の61才の男性の証言。Trinidadito, 10/VII/1995.
- 18) El Heraldo (Cochabamba), no. 1179, 16/IV/1887; El Pueblo Cruceño (Santa Cruz), no. 7, 26/XI/1887.
- 19) 「聖地」探索運動については、Riester 1976: 309-339 を参照せよ。このメシアニズム運動については、機会を改めて本格的に論じるつもりである。

- 20) Los Debates (Sucre), no. 117, 10/XI/1887.
21) サン・ロレンソ在任の57才の男性の証言。San Lorenzo, 26/II/1996.

文 献

- Arteche, Gumercindo Gómez de
1989 *JHS Misión de los P. P. Astrain, Manzanedo y Arteche*, edited by J. Cortez Rodríguez. Trinidad: CIDDEBENI.
- Barnadas, Josep M. (ed.)
1990 *El libro, espejo de la cultura: estudios sobre la cultura del libro en Bolivia*. Cochabamba: Editorial "Los Amigos del Libro".
- Block, David
1994 *Mission culture on the Upper Amazon: native tradition, Jesuit enterprise, & secular policy in Moxos, 1660-1880*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- Bolivia, República de
1995 *Censo indígena del Oriente, Chaco y Amazonía, 1994-1995*. La Paz: República de Bolivia.
- Callaú, Demetrio
1906 Informe anual de la Fiscalía del Distrito del Beni. In *Anexos de la memoria presentada al H. Congreso Nacional de 1906*, pp. 226-237. La Paz: Ministerio de Justicia e Instrucción Pública.
- Carvalho Urey, Antonio
1975 Síntesis histórica del Beni. In *Monografía de Bolivia, vol. 4, Beni-Pando-Tarija*, pp. 15-70. La Paz: Biblioteca del Sesquicentenario de la República.
1983 *Beni: ensayo de interpretación histórica*. Trinidad.
- Céspedes, Manuel G.
1906 Informe anual del Juez Superior del Distrito del Beni. In *Anexos de la memoria presentada al H. Congreso Nacional de 1906*, pp. 119-127. La Paz: Ministerio de Justicia e Instrucción Pública.
- Cronenbold, José
1910 *Informe del Prefecto y Comandante General del Departamento del Beni Sr. José Cronenbold presentado ante el Supremo Gobierno de la República*. Trinidad: Departamento del Beni.
- Greever, Janet Groff
1987 *José Ballivián y el Oriente Boliviano*, translated by J. L. Roca. La Paz: Empresa Editorial Siglo Ltda.
- ホップズ, T.
1974 『リヴァイアサン (国家論)』(世界の大思想9) 水田洋・田中浩訳, 東京: 河出書房新社。
- 加藤隆浩
1991 「ビシュタコ——アンデス世界における村落と都市の媒介者」杉本良男編『伝統宗教と知識』(南山大学人類学研究所叢書Ⅳ) pp. 121-148, 名古屋: 南山大学人類学研究所。
- Limpas Saucedo, Manuel
1942 *Los gobernadores de Mojos*. La Paz: Escuela Tipográfica Salesiana.
- Morote Best, Efraín
1988 *Aldeas sumergidas: cultura popular y sociedad en los Andes* (biblioteca de la tradición oral andina 9). Cusco: Centro de Estudios Rurales Andinos "Bartolomé de Las Casas".
- René-Moreno, Gabriel
1974 *Catálogo del archivo de Mojos y Chiquitos*. La Paz: Librería Editorial "Juventud".
- Riester, Jürgen

- 1976 *En busca de la Loma Santa*. La Paz: Editorial Los Amigos del Libro.
齋藤 晃
- 1997 「イエズス会ミッションにおける民族の創出——植民地時代の「モホ」の社会変容」
『民博通信』77, 74-96。
- Suárez, Daniel
- 1887 *Manifiesto del Ex-Prefecto del Beni ante la opinión pública*. Trinidad: Imprenta Suárez y Hnos.
- Wachtel, Nathan
- 1992 *Dieux et vampires: retour à Chipaya*. Paris: Éditions du Seuil. (『神々と吸血鬼——民族学のフィールドから』齋藤晃訳, 東京: 岩波書店, 1997。)